

四年間の学書に寄せて

先日、あるキャスターの方が伝統と伝承ということについて述べておられました。正確な引用ではありませんが、およそ次のような内容でした。

「伝わってきたものをそのまま伝えるのが伝承であるが、伝統は各時代の職人が新しいことにチャレンジしてきた連続である。だから伝統は革新、イノベーションである。」

「新しいこと」が、単に新奇で浮薄な新しさでないことは明白です。先人が築き遺してきたもの、その核心を自ら探求しつつ、その上に個性や創意の翼を広げていく、そうした精神、態度への言及であり、温故知新といえるものでしょう。

またある新進気鋭のピアニストを追ったドキュメントも拝見しました。皆さんと同年代にして国際的な注目を浴びる彼は、「音がその人の顔になる」として「その顔がなきやこの世界、大学生までですよ、やっていけない。その音色っていうのが絶対条件になる、世界で闘うためには。」と自らの探求への決意を話しました。

これらは本学の学書でもテーマにしてきたことです。身近なお手本の再現や模倣から離れて、四年間の全てを伝統の中に身を置き、古人の美や創造性の核心を汲み取ろうとしてきました。また一方で、今を生きる皆さんがそれぞれに、様々な領域や時代性と接続しながら、自分の発想や思考、感性や技術を伸ばし、自分の表現を他者に向けて開く勇気を養ってきました。

この作品集は、その成果と成長の記録です。迷いも発見も、喜びや悔しさも、その全てが、形や線、空間に託されていることでしょうか。そこに一つとして同じものがない皆さんの「顔」が表れ始めているのではないのでしょうか。

伝統を学ぶ、そしてその人の「顔」をつくる。皆さんの旅は始まったばかりです。今後の長い学書を経て、それぞれの「顔」をもった表現が、それぞれの場所に、いつか花開くことを願っています。